

博士論文（要約）

論文題目 『中観学派によるプロダガラ（人格主体）説批判』

氏名 鄭祥教

## 目次

1	序論 .....	
1.1	研究目的と構成 .....	
1.2	先行研究—プロダガラ説を伝える文献研究を中心として— .....	
2	本論 .....	
2.1	蘊と別異のプロダガラ説—『般若灯論』を中心に—	
2.1.1	はじめに.....	
2.1.2	『般若灯論復注』におけるプロダガラ説—『中論』第12章注釈を中心に— .....	
2.1.3	『般若灯論』第9章のプロダガラ説 .....	
2.1.3.1	「先なる主体」としてのプロダガラ .....	
2.1.3.2	「推論式」と「アーガマ」によるプロダガラ論者の主張 .....	
2.1.3.3	『仏護注』の解釈におけるプロダガラ説 .....	
2.1.4	まとめ .....	
2.2	蘊と同一のプロダガラ説—『入中論』を中心に—	
2.2.1	はじめに.....	
2.2.2	『入中論』におけるプロダガラ説としての「蘊即我」「心即我」 .....	
2.2.3	「蘊即我」「心即我」の意味をめぐって .....	
2.2.4	「蘊即我」「心即我」と「非即非離蘊」としてのプロダガラ説の両立不可能性について .....	
2.2.5	『三弥底部論』における「蘊即我」について—教証の問題をめぐって— .....	
2.2.6	まとめ .....	
2.3	Candrakīrtiの「蘊即我」「心即我」批判—初期仏典の引用を中心として—	
2.4	「非即非離蘊」のプロダガラ説批判—「七通りの仕方による考察」を中心として— .....	
2.4.1	はじめに.....	
2.4.2	「七通りの仕方による考察」の構造 .....	
2.4.2.1	伝統的的我見批判との関係 .....	
2.4.2.2	プロダガラ説との関係 .....	
2.4.2.3	「集合体」と「形態」の实在性批判 .....	
2.4.2.4	「形態」の意味をめぐって .....	

2.4.3	まとめ.....	
2.5	<i>Tattvasaṃgraha</i> ・ <i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> におけるブドガラ説批判.....	
2.5.1	はじめに.....	
2.5.2	<i>Tattvasaṃgraha</i> および <i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> 第7章第6節「犢子部が構想分別するアーマン（ブドガラ）の考察」テキスト考—Bauddha Bharati本の修訂をめぐる—.....	
2.5.2.1	修訂一覧.....	
2.5.2.2	考察.....	
2.5.3	TS・TSPにおけるブドガラ説批判—論証式と教証を中心として—	
2.5.3.1	実在物(vastu)の定義によるブドガラの不可説性批判—論証式を中心に—.....	
2.5.3.2	教証をめぐる.....	
2.5.4	まとめ.....	
3.	結論.....	
3.1	「蘊と同一」「蘊と別異」としてのブドガラ説に関して.....	
3.2	『入中論』におけるブドガラ説批判.....	
3.3	<i>Tattvasaṃgraha</i> ・ <i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> におけるブドガラ説批判.....	
4.	テキスト・訳注.....	
	『入中論注』・『入中論複注』に関する凡例.....	
	『入中論注』・『入中論複注』シノプシス.....	
	<i>Dbu ma la 'jug pa'i bshad pa</i> (A Critical edition of the Tibetan Text).....	
	<i>Dbu ma la 'jug pa'i 'grel bshad</i> (A Critical edition of the Tibetan Text)	
	『入中論注』第6章第126偈-160偈ブドガラ論批判和訳.....	
	『入中論複注』第6章第126偈-160偈ブドガラ論批判和訳.....	
	<i>Tattvasaṃgraha</i> ・ <i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> 校訂テキストに関する凡例.....	
	<i>Tattvasaṃgraha</i> ・ <i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> シノプシス	
	<i>Tattvasaṃgraha</i> Section 6 in Chapter 7 <i>Vātsīputrīyaparikalpitātmaparīkṣā</i> Diplomatic edition of Jaisalmer manuscript.....	
	<i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> Section 6 in Chapter 7 <i>Vātsīputrīyaparikalpitātmaparīkṣā</i> Diplomatic edition of Jaisalmer manuscript.....	
	<i>Tattvasaṃgraha</i> Section 6 in Chapter 7 <i>Vātsīputrīyaparikalpitātmaparīkṣā</i> Diplomatic edition of Pāṭaṇa manuscript.....	
	<i>Tattvasaṃgrahapañjikā</i> Section 6 in Chapter 7 <i>Vātsīputrīyaparikalpitātmaparīkṣā</i> Diplomatic edition of Pāṭaṇa manuscript.....	

*Tattvasaṃgrahapañjikā* Section 6 in Chapter 7 *Vātsīputrīyaparikalpītmaparīkṣā* Critical edition .....

*De kho na nyid bsdus pa'i bka' 'grel Gnas ma'i bu pa'i bdag brtag pa ste bcu gnyis pa* (A Critical edition of the Tibetan Text) .....

*Tattvasaṃgraha(-pañjikā)* 第7章第6節第336偈－第349偈 「犢子部が構想分別するアートマンの考察」 和訳 .....

<略号および使用テキスト> .....

[参考文献] .....

本文

5年後出版のため、公開しません。

## 参考文献一覧

### 1. 和文

赤羽 津

[2003] 「離一多性を証因とする無自性論証」と *avicāraikaramaṇīya* をめぐる問題 『印度学仏教学研究』 51-2, pp. 905-909.

池田 練太郎

[1991] 「中有の機能について」 『印度学仏教学研究』 39-2, pp. 926-922.

稲見 正浩

[2012] 「存在論－存在と因果」 『認識論と論理学』（「シリーズ大乘仏教」第9巻） pp. 49-90, 東京：春秋社.

宇井 伯寿

[1968] 『国訳中論』（宇井伯寿著作選集4） 東京：大東出版社.

上田 昇

[1990] 「Candrakīrtiの無我説」 『仏教学』 28, pp. 1-19.

瓜生津 隆眞

[1963] 「Candrakīrtiのアートマン批判」 『印度学仏教学研究』 11-2, pp. 344-352.

小川 一乗

[1976] 『空性思想の研究－入中論の解説－』 京都：文栄堂.

[1988] 『空性思想の研究Ⅱ－ツォンカパ造『意趣善明』第六章のテキストの和訳－』 京都：文栄堂.

奥住 毅

[1988] 『中論註釈書の研究(チャンドラキールティ『プラサンナパダー』和訳)』 東京：大蔵出版.

片山 一良

[2002] 「中部(マッジマニカーヤ) 後分五十経篇Ⅱ」 『パーリ仏典 第1期6』 東京：大蔵出版.

加治 洋一

[1985] 「『三彌底部論』の研究—我に関する章— (上)」 『仏教学セミナー』 42.

[1987] 「『三彌底部論』の研究—我に関する章— (中)」 『仏教学セミナー』 46.

[1990] 「『三彌底部論』の研究—我に関する章— (下)」 『仏教学セミナー』 51.

梶山 唯一

[1978] 「中観哲学と因果論」 『仏教思想3因果』 pp.149-175, 京都：平楽寺書店.

[1979] 「バーヴァヴィヴェーカの業思想」 『業思想研究』 pp. 305-357, 京都：平楽寺書店.

桂 紹隆

[2011] 「インド仏教思想史における大乘仏教—無と有との対論」 『大乘仏教とは何か』 (「シリーズ大乘仏教」 第1巻) pp. 254-288, 東京：春秋社.

木村 俊彦

[1981] 『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究 (付・ダルモータラ釈『ニヤーヤビンドゥ』和訳)』 東京：木耳社.

三枝 充恵

[2004] 「初期仏教の思想」 『三枝充恵著作集第二巻』 京都：法蔵館.

斎藤 明

[1991] 「Nāgārjunaにおける自我とニルヴァーナ」 『前田専学博士還暦記念論集・「我」の思想』 pp. 181-196, 東京：春秋社.

坂本 幸男

[1981] 『阿毘達磨の研究』 東京：大東出版社.

桜部 健

- [1981] 「俱舍論における我論－破我品の所説－」『自我と無我－インド思想と仏教の根本問題－』 pp. 455-478, 京都：平楽寺書店.
- [2002] 『阿含の仏教』 京都：文栄堂.

田端 哲哉

- [1977] 「説一切有部の基本命題と *satkāyadr̥ṣṭi*」『印度学仏教学研究』 25-2, pp. 190-193.

鄭 祥教

- [2013a] 「Candrakīrtiの無我論証」『印度学仏教学研究』 61-2, pp. 910-907.
- [2013b] 「チャンドラキールティのプドガラ（人格主体）論批判－「七通りの仕方による考察」を中心として－」『インド哲学仏教学研究』 20, pp. 65-76.
- [2014] 「『撰真實論』および『撰真實論細疏』におけるプドガラ説批判」『印度学仏教学研究』 62-2, pp. 938-941.
- [2015] 「Tattvasaṃgrahaおよび Tattvasaṃgrahapañjikā」第7章1第6節「犢子部が構想するアートマン（プドガラ）の考察」のテクスト考」『インド哲学仏教学研究』 23, pp. 73-84.

高崎 直道

- [1982] 「UPĀDĀNA(取)について－『中論』の用例をめぐる－」『仏教教理の研究：田村芳朗博士還暦記念論集』 pp. 39-51, 東京：春秋社.

高橋 壯

- [1970] 「『俱舍論』の二諦説」『印度学仏教学研究』 19-1, pp. 130-131.

武田 宏道

- [1998] 「犢子部のプドガラ説－『俱舍論』破我品の所説を中心に－」『龍谷大學論集』 451, pp. 1-36.
- [2003] 「プドガラの撰属をめぐるプドガラ説批判－『俱舍論』破我品の所説を中心に－」『仏教学研究』 58/59, pp. 45-66.
- [2007] 『無我の論証－『俱舍論』破我品の研究－』（博士学位論文、龍谷大学）



立花 寛紹

[1993] 「Candrakīrtiの無我観の一考察」『仏教学研究』49, pp. 51-73.

戸崎 宏正

[1979] 『仏教認識論の研究』上巻, 東京: 大東出版社.

中村 元

[1956] 『ことばの形而上學』東京: 岩波書店.

[1981] 「インド思想一般から見た無我思想」『自我と無我』pp. 3-142, 京都: 平楽寺書店.

[1983] 「インド論理学の理解のために」『IIインド論理学・術語集成』法華経文化研究所.

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文

[1990] 『梵語仏典の研究Ⅲ（論書篇）』京都: 平楽寺書店.

内藤 昭文

[1984] 「TSP におけるアートマン説批判 (II)-プドガラ説をめぐって-(1)」『印度学仏教学研究』33-1, pp. 140-141.

[1985] 「TSP におけるアートマン説批判 (II)-プドガラ説をめぐって-(2)」『佛教学研究』41, pp. 20-51.

長澤 實導

[1939] 「『ダットヴァサングラハ』に於ける補特伽羅説の批判」『仏教研究』3-3, pp. 69-81 (長澤實導 『瑜伽行思想と密教の研究』大東出版社, 1978, pp. 191-205再録).

那須 良彦

[2004] 「有部の不失法因と正量部の不失—『中論』第17章所述の「不失」に対する観誓の解釈—」『印度学仏教学研究』53-1, pp. 371-367.

那須 真裕美

[2002a] 「中観派における真理 (satya) と考察 (vicāra)」 『印度学仏教学研究』 50-2, pp. 875-878.

[2002b] 「考察(vicāra)から見た中観派の世俗諦」 『印度学仏教学研究』 51-1, pp. 408-411.

並川 孝義

[2011] 『インド仏教教団正量部の研究』 東京：大蔵出版.

本多 至成

[2010] 『正量部の業思想』 京都：永田文昌堂.

本多 恵

[1988] 『チャンドラキールティ中論註和訳』 東京：国書刊行会.

森山 清徹

[1998] 「カマラシーラの常往論批判とダルマキールティの刹那滅論：サーンキヤの顕現説、説一切有部の三無為説、特子部のプロダガラ説の吟味」 文学部論集 82, pp. 1-19.

村上 真完

[1991] 『インド哲学概論』 京都：平楽寺書店.

[1993a] 「人格主体論（靈魂論）－『俱舎論』破我品訳註（一）－」 『塚本啓祥教授還暦記念論文集：知の邂逅—仏教と科学』 佼成出版社, pp. 271-292.

[1993b] 「人格主体論（靈魂論）－『俱舎論』破我品訳註（二）－」 『渡辺文麿博士追悼記念論集：原始仏教と大乘仏教』 下、永田文昌堂, pp. 99-140.

三友 健容

[1975] 「我」を主張した部派（一）（『三論集』第三輯） pp.125-134.

[1976a] 「我」を主張した部派（二）（『三論集』第三輯） pp.135-142.

[1976b] 「我」を主張した部派（三）（『三論集』第三輯） pp.143-152.

安井 廣濟

[1961] 『中観思想の研究』 京都：法藏館.

## 2. 欧文

Bhattacharya, Kamaleswar

[1973] *L'Ātman-Brahman dans le bouddhisme ancien*, Paris, EFEO.

Conze, Edward

[1962] *Buddhist Thought in India : Three Phases of Buddhist Philosophy*, London ; Boston : Allen&Unwin, repr. *Mrs M Conze*, 1983.

Cousins, Lance

[1994] “Person and self”, in *Buddhism into the Year 2000: International Conference Proceedings*, Bangkok and Los Angeles: Dhammakaya Foundation.

Duerlinger, James

[2003] *Indian Buddhist theories of persons: Vasubandhu's "Refutation of the Theory of a Self"*, London and New York: Routledge Curzon.

[2008] “Candrakīrti on the theories of persons of the sāmmitīyas and āryasāmmitīyas” *Philosophy East & West* Vol.58,no.4, University of Hawai'i Press, pp. 446-469.

Eltschinger, Vincent and Ratié, Isabelle

[2013] *Self, No-self, and Salvation: Dharmakīrti's Critique of the Notion of Self and Person*, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Gethin, Rupert

[1998] *The foundations of Buddhism*, Oxford and New York : Oxford University Press.

Iida, Shotaro

[1980] *Reason and Emptiness*. Tokyo : Hokuseido.

Murti, T.R.V

[1980] *The Central Philosophy of Buddhism-A Study of Mādhyamika system-*, George Allen & Unwin paperbacks, London.

Jha, Ganganatha

- [1937] *The Tattvasaṅgraha of Śāntarākṣita: with the commentary of Kamalaśīla*, 2vol., GOS LX X X ; LX X X III, Baroda, repr. Delhi 1986.

La Vallée-Poussin, Louis de

- [1905] *Deux notes sur le Pratītyasamutpāda*, extr.t. I, des Actes du XIV<sup>o</sup> congrès intern. des Orientalistes.

Rahula, Walpola

- [1961] *L'enseignement du Bouddha*, Paris, Seuil.

Schayer, Stanislaw

- [1932] “Kamalaśīla’s Kritik des Pudgalavāda,” *Rocznik Orientalistyczny Tom VIII*, Lwów (M. Mejer(ed.): *Stanislaw Schayer, On Philosophizing of the Hindus, Selected Papers*, Warsaw 1988, 再録)

Lamotte, Étienne

- [1988] *History of Indian Buddhism: From the Origins to the Śaka Era*, translated from the French by Sara Boin-Webb, Louvain and Paris : Peters Press.

Li, Xue zhu

- [2015] “*Madhyamakāvātāra –kārikā* Chapter 6”, *Journal of Indian Philosophy*, 43-1, Springer.

Potter, K.H., et al (eds)

- [1996] *Encyclopedia of Indian Philosophies: Volume VII: Abhidharma Buddhism to 150A.D.*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Priestley, Leonard C. D. C.

- [1999] *Pudgalavāda Buddhism. The Reality of the Indeterminate Self*, South Asian Studies Papers, no. 12. Monograph no.1, University of Toronto, Centre for South Asian Studies.

Sharma, Rama Nath

[1995] *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini* vol. III, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd.

Saito, Akira

[1984] *A study of The Buddhapālita-mūlamadhyamaka-vṛtti*, A Thesis Submitted for the Degree of Doctor of Philosophy in the Australian National University.

[2011] “Bhavya’s Critique of the Sāṃkhya Theory of pratibimba”, *Studies in Indian Philosophy and Buddhism*18, pp. 13-22.

Thích Thiện Châu

[1977] *Les Sectes personalistes (Pudgalavâdin) du bouddhisme ancien*. Thèse pour le Docterat d’État ès-Lettres et Sciences humaines, Université de la Sorbonne Nouvelle (Paris III). English translation by Sara Boin-Webb. Ho Chi Min City: Vietnam Buddhist Research Institute.

Watanabe, Fumimaro

[1983] *Philosophy and its Development in The Nikāyas and Abhidhamma*, Delhi : Motilal Banarsidass.

Williams, Paul and Tribe, Anthony

[2000] *Buddhist Thought: A Complete Introduction to the Indian Tradition*, London and Newyork: Routledge.

### 3.その他

李 泰昇

[2012] 『Śāntarakṣita의 中觀思想』 서울: 仏教時代社.

尹 浩眞

[1992] 『無我輪廻問題의研究』 서울 : 民族社.

## 論文内容の要旨

### 1. 研究の目的と構成

初期仏教以来、無我説は仏教の中心的思想として重要視されてきたが、同時にまた、業・修行・輪廻の主体および果報の享受者などを無我説とどのように両立させるのかについて、仏教内部で大きな問題を残した。

B.C.3C 頃に上座部から分裂したと見られる犢子部(Vātsīputriya)、および B.C.1C 頃に犢子部から分派したと推定される正量部(Sāṃmitīya)などの部派によって代表されるブドガラ論者(Pudgalavādin)は、このような問題を「第五不可説法蔵」とも呼ばれる、「五蘊と同一あるいは別異などとは語りえない(avācya)ブドガラ(人格主体)」説を導入することによって解決しようとした。

すなわち、ブドガラが五蘊(心身の五つの構成要素)と同一であるなら、五蘊と同様にブドガラも断滅することになり、業・修行・輪廻の主体および果報の享受者などを想定しにくいという問題が生じる。他方また、ブドガラが五蘊と別異であるとするなら、ブドガラは不滅のアートマンと同じように、無我説と正面から衝突する問題が発生してしまう。それゆえ、彼らは *Ekapuggala-vagga*, *Bhārahārasutta* などの経典を引用し、ブッダが説示した「自我」の意味には人格主体が存在することを主張し、その人格主体を「五蘊と同一あるいは別異などと語りえないブドガラ」であると宣言した。

一方、この「非即非離蘊」のブドガラという概念が、無我説を保持しながら人格主体を立てようとした工夫の産物であったとしても、仏教内部の他の諸部派はこのようなブドガラをアートマンの一種と見なして批判をしつづけた。そうした批判は、早くは『論事』、『識身足論』などにも見られ、初期や中期の中観派の諸文献から、さらには後期中観派の『真理綱要』や『入菩提行論細疏』などに至るまで継続された。しかしながら、このような批判の痕跡が多く、仏教文献に残されているという事実は、それほど長いあいだブドガラ論者がインドで存続し、影響力を保持していたことを示す証左でもあろう。実際、玄奘の『大唐西域記』(646年編纂)によると、ブドガラ論者達の規模は、7C のインド小乗仏教全体のおよそ半分に当たると推定されている。

ところが、ブドガラ説を主張したとされる諸部派の文献はほとんど残されていないため、その教理の全貌を描くことはできず、ブドガラ説を批判した諸文献を通して、ブドガラ説の概要は断片的に知られている。それゆえ、その批判の内容には共通点が見られる反面、文献によってかなり異なる様相を示すこともある。このような事情をふまえ、本論文は『中論』およびその注釈書、『入中論』、*Tattvasaṃgraha(TS)*・*Tattvasaṃgrahapañjikā(TSP)*など、インド中観学派の諸文献を中心にブドガラ説批判を分析し、検証することを目ざした。このような研究目的にしたがい、本論文の[2.本論]は、[2.1『中論』およびその注釈書]、[2.2-2.4『入中論』]、[2.5 *Tattvasaṃgraha(TS)*・*Tattvasaṃgrahapañjikā(TSP)*]によって構成される。

### 2. 『中論』およびその注釈書におけるブドガラ説批判

まず、2.1『中論』およびその注釈書におけるブドガラ説批判に関しては、『中論』自体は批判対象となる部派を特定していないため、『中論』注釈書を中心にブドガラ説批判を検討した。

その中で『青目注』は、『中論』第10章第16偈において誤った「自我論」を主張する部派として犢子部に言及するが、それ以外のブドガラ説に関する情報は伝えていない。一方また、

『中論』第9章の関連箇所をブドガラ説として注釈したのは『般若灯論』からであると考えられる。そして『般若灯論』が犢子部説として想定した第7章および第9章の該当箇所は *Prasannapadā* でも正量部説として注釈されたが、そこでもブドガラ論者の教理は詳細に論じられてはいない。このため、はたして『中論』の注釈家たちのブドガラ説に関する記述に信憑性があるのかという疑問は残される。というのも、第9章の「見る感官などより先なる主体」は必然的に「五蘊と別異」の存在であることが想定されるが、そうであるなら、よく知られる「非即非離蘊」、すなわち第五不可説法蔵としてのブドガラの存在様態に関する規定と矛盾が生じてしまうからである。しかしながら、この点に関して、『中観心論』とその注釈 *Tarkajvālā* の第3章・第90–第93偈は、「五蘊と別異」のブドガラと「非即非離蘊」としてのブドガラ説を併せて伝えている。また『入中論』第6章第126偈は、「蘊即我」「心即我」のブドガラ説を正量部説であるとし、他方、同章第146偈は「非即非離蘊」のブドガラ説を正量部説であると示した。この問題について、既存の一部の研究でも、*Tarkajvālā* のブドガラ説に関して、犢子部内部に二つの見解が存在したとみる解釈があり、また『入中論』の見解に関しては、*Candrakīrti* の単純な誤解やブドガラ説に対する意図的な歪曲であるとする解釈もあったが、注目されなかった。しかし、単純な誤解や意図的な歪曲であるとする解釈には、「非即非離蘊」のブドガラ説以外を認めず、文献にも明確に残されている「蘊と同一」「蘊と別異」のブドガラ説をすべて無意味なものとする問題があった。本論文はこの問題を解明するために、考察を加えた。

まず *Avalokītavratā* は『般若灯論復注』第12章において、ブドガラ説を唱えた七部派に言及しながら、その中の一部は五蘊と同一のブドガラを、また一部は五蘊と異なるブドガラを主張したと注釈した。さらに、18世紀に活躍したゲルク派の学僧 *lCang skyā Rol pa'i rdo rje* の『宗義設定』もまた、そのような *Avalokītavratā* のブドガラ論者に対する記述を、ブドガラ論者内部の部派の理解を示すものとして引用していることも指摘した。

一方、『般若灯論』はまた、第9章の「先なる存在」を犢子部説として規定する際、推論 (*anumāna*) を重んじる犢子部とともに、*Bhartṛhari*(5C 頃)の *Vākhyapadīya* を引用したうえで、推論よりもアーガマを重んじる犢子部の学説を紹介している。また、『般若灯論復注』はこの「先なる存在」としてのブドガラを「遍在するアートマン」として注釈しており、このブドガラ説はサーンキヤ学説ともある程度の類似性が見られる。ただし、「蘊と同一」や「蘊と別異」のブドガラ説が成立するとすれば、「非即非離蘊」のブドガラ説とは両立しえないという問題が発生する。

それゆえ本章では、「非即非離蘊」のみでブドガラ説を統一的に理解しようとしてきた従来の研究とは異なる観点から、「非即非離蘊」以外のブドガラ説の教理も独立して存在していた可能性を詳論した。

### 3. 『入中論』におけるブドガラ説批判

『入中論』第6章のブドガラ説批判は、第126偈–第145偈における「蘊即我」「心即我」としてのブドガラ説に対する批判と、第146偈–第157偈の「非即非離蘊」としてのブドガラ説に対する批判とに区分できる。「蘊即我」「心即我」は初期仏典においても批判されるアートマン（自我）説ともいえるため、*Candrakīrti* もまた初期仏典を引用して批判する。他方、「非即非離蘊」のブドガラを批判するために、*Candrakīrti* は他の文献には見られない、独自の「七通りの仕方による考察」を提示した。それゆえ、本章では *Candrakīrti* が引用する初期仏典の内容とともに、「七通りの仕方による考察」の理論を分析した。

#### 4. 『真理綱要』 *Tattvasamgraha*(TS)・『真理綱要細疏』 *Tattvasamgrahapañjikā*(TSP) におけるブドガラ説批判

TS・TSP は第7章第6節“*Vātsīputriyaparikalpitātmaparīkṣā*” (第336–349偈) においてブドガラ説を批判する。この箇所テキストについては、その重要性に鑑みて、本論文は写本に基づいて新たに校訂テキストを作成し、テキストをめぐる諸問題を検討するとともに、その内容を分析考察した。

まず、TS・TSP の現存する二種類のサンスクリット写本である *Jesalmer* および *Pattan* 本に基づいて *Diplomatic edition* を作成した。これによって既存の二種類の校訂テキストである GOS 本・BBS 本と比較し、数十箇所の異読が存在することを確認した。本論文はこの新たな校訂テキストを付論として掲載し、より信頼度の高いテキストの提供を試みた。

一方、TS・TSP におけるブドガラ説批判の特徴は、*Dharmakīrti* の論理学を積極的に援用していることと、教証に関しては『俱舍論』「破我品」に従っていることである。つまり、経典に依拠してブドガラの存在を主張するブドガラ論者からの反論は、その内容については、先行研究が指摘するように「破我品」に見られるブドガラ論者の見解とほぼ同一といえる。そして、「五蘊と同一あるいは別異とは語りえない実在物」というブドガラの存在様態をめぐる議論では、TS・TSP は *Nyāyabindu* に見られる「相互に排除して存在する特徴」(*parasparaparihārasthitalakṣaṇa*) という概念を援用した。すなわち TS・TSP は、「実在物」であるなら必ず「同一か別異」のいずれかとして規定されなければならないということを前提とした。さらにまた、「実在物」に対する *Dharmakīrti* の重要な定義である「効果的作用能力」(*arthakriyāśakti*)を採用した上で、「刹那的であること」(*kṣaṇikatva*)という帰結をもブドガラに適用した。これにより、同一あるいは別異などと語りえないブドガラは以上のような実在物としての概念規定に適さないことから（「遍充関係」の不成立）、TS・TSP はブドガラ説の論理的矛盾を指摘した。

一方また、TS・TSP と同様に後期中観学派の文献である『中観光明論』と『入菩薩行論細疏』におけるブドガラ説批判は、このような *Dharmakīrti* の思想概念を適用した TS・TSP の議論に忠実に従っていることも併せて考察した。

#### 5. 付論

付論として、本論で使用した関連テキストとその訳注を掲載した。まず、本論の2.2-2.4に関連する『入中論注』と『入中論複注』の第6章・第126偈から第160偈までの注釈箇所について、そのチベット語訳テキストの *Critical Edition* を *sDe dge, Co ne, Peking, dGa' ldan, sNar thang* の五版本に基づいて作成し、和訳とともに掲載した。

さらに、本論の2.5に関連する TS・TSP の第7章第6節第336偈から第349偈までの注釈箇所のテキストに関しては、現存する二種類のサンスクリット語写本である *Jesalmer* および *Pattan* 本の *Diplomatic Edition* を作成するとともに、これに基づいて、GOS 本と BBS 本の二種類の *Critical Edition* およびチベット語訳を参照した上で、新たな *Critical Edition* を作成し提示した。